

St. Luke's International University Repository

Characteristics of Theses and Dissertations at St.Luke's College of Nursing Graduate School: The First Twenty Years.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 有森, 直子, 射場, 典子, 鈴木, 里利, 松本, 直子, 伊藤, 和弘, 堀内, 成子, 横山, 美樹, 及川, 郁子, 白木, 和夫, 菱沼, 典子, 小澤, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/451

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



報 告

聖路加看護大学大学院における学位論文の特性 —開設20年を振り返って—

有森 直子¹⁾ 射場 典子²⁾ 鈴木 里利³⁾
 松本 直子⁴⁾ 伊藤 和弘⁵⁾ 堀内 成子⁶⁾
 横山 美樹⁷⁾ 及川 郁子⁸⁾ 白木 和夫⁹⁾
 菱沼 典子¹⁰⁾ 小澤 道子¹¹⁾

Characteristics of Theses and Dissertations at St. Luke's College of Nursing Graduate School: The First Twenty Years

Naoko ARIMORI, R.N., M.W., M.N.¹⁾, Noriko IBA, R.N., M.N.²⁾
 Satori SUZUKI, R.N., M.N.³⁾, Naoko MATSUMOTO,⁴⁾
 Kazuhiro ITO, M.Ed.⁵⁾, Shigeko HORIUCHI, R.N., M.W., D.N.Sc..⁶⁾
 Miki YOKOYAMA, R.N., M.N.⁷⁾, Ikuko OIKAWA, R.N., M.N.⁸⁾
 Kazuo SIRAKI, MD., Ph.D.⁹⁾, Michiko HISHINUMA, R.N., M.S.¹⁰⁾
 Michiko OZAWA, R.N.¹¹⁾

[Abstract]

The purpose of this study was to describe characteristics of masters' theses and doctoral dissertations during the first twenty years of the Graduate School to make that a basis from which to discuss the future of the Graduate School. A total of 278 masters' theses and 24 doctoral dissertations were studied. Major analysis items included: student specialty, year of submission, source of data, study design, method of data gathering, type of quantitative analysis, type of qualitative analysis and inclusion of a statement describing ethical considerations.

Care receivers (child and adult patients) were the source of data for more than half the masters' theses. Of all studies, 70% were descriptive. Interview was the most frequently used data gathering method, followed by questionnaire and observation. Regarding data analysis, 205 used qualitative analysis, 128 used quantitative analysis and 55 used both. 80% of the theses included a statement describing ethical considerations.

-
- 1) 聖路加看護大学 母性看護・助産学
 - 2) 聖路加看護大学 成人看護学
 - 3) 聖路加看護大学 小児看護学
 - 4) 聖路加看護大学 図書館司書
 - 5) 聖路加看護大学 社会学
 - 6) 聖路加看護大学 母性看護・助産学
 - 7) 聖路加看護大学 基礎看護学
 - 8) 聖路加看護大学 小児看護学
 - 9) 聖路加看護大学大学院 病態生理学
 - 10) 聖路加看護大学 基礎看護学
 - 11) 聖路加看護大学 基礎看護学

Care receivers (child and adult patients) were the source of data for 80% of doctoral dissertations. For the preliminary studies, qualitative descriptive design was most frequently used (6 studies). For the design of the major study, correlational designs were used most frequently (8 studies), followed by methodological and qualitative descriptive designs (6 of each), sub-experimental designs (2) and experimental designs (1). Combining preliminary and major studies, 21 used qualitative analysis, 42 quantitative analysis and 5 used both. For their dissertations, 7 students adopted qualitative analysis for their preliminary study and quantitative analysis for the major study. All dissertations included a statement describing ethical considerations.

On the basis of this analysis and our current understandings, we suggest that studies to measure the direct effects of nursing care be more emphasized. After taking into consideration various points of view, it is recommended that courses of study and support systems be reviewed in light of expectations for graduate student research.

[Key Words] nursing research, study design, Japan,
 [キーワード] 看護研究, 研究デザイン, 日本,
 theses, dissertations
 学位論文・修士論文・博士論文

[抄 録]

聖路加看護大学大学院修士課程が開設して20年を迎えた。本研究の目的は、過去20年間の大学院博士課程（前期・後期）の修士・博士論文の特性を明らかにし、今後の本学大学院の方向性を検討するための基礎資料とすることである。修士論文278編、博士論文24編を対象とした。主な分析の項目は、専攻領域、提出年、研究対象、研究デザイン、データ収集方法、データ分析方法、量的分析の種類、質的分析の種類、倫理的配慮であった。修士論文において、研究の対象は、ケアの受け手（患者・患児）が半数以上を占めた。研究デザインは、記述研究が7割を占めた。データ収集方法は、面接法が最も多く、次いで質問紙法、観察法と続いた。データ分析方法は、質的分析205編、量的分析128編、そのうち両方の分析を用いているものが55編あった。倫理的配慮については、約8割の論文において記載されていた。博士論文においては、研究の対象は、約8割がケアの受け手（患者・患児）であった。研究デザインは、「予備研究」では記述研究が6編と最も多く、「本研究」では、相関研究が最も多く8編、方法論的研究と記述研究が各6編、準実験研究2編、実験研究は1編であった。予備研究・本研究とあわせてみたデータ分析の傾向は、質的分析21編、量的分析42編、両方の分析を用いているものが5編という結果となった。また、予備研究で質的分析を行い本研究で量的分析を行っている論文は24論文中7編みられた。また、倫理的配慮については、全ての論文において、行っていることが明記されていた。

以上の結果から、本学の学位論文の特徴が明確となり、今後の課題として、研究の連続性と看護の直接的な効果を測定するような介入研究の実施などが課題であり、そのためのより多角的な視点で研究支援体制の整備が期待される。

I. はじめに

聖路加看護大学（以下「本学」という。）が大

学院修士（博士前期）課程を開設し20年が経過し、わが国における最初の看護学の博士課程を開設して12年を迎えた。その間、看護学修士278名、博

表1 修士課程教育課程1997年度～

領域	授業科目		修論コース		CN コース	
			単位数		単位数	
			必修	選択	必修	選択
基盤分野	形態機能学			2		2
	病態生理学			2		2
	看護心理学	特論		2		2
		演習		2		2
	看護社会学	特論		2		2
		演習		2		2
	看護学研究法		2		*2	
	看護理論		2		*2	
	看護倫理			2	*2	
	統計学		2			2
専門	特別講義			1		1
分野	基礎系看護学	特論Ⅰ		2		
		特論Ⅱ		2		
		基礎看護学演習Ⅰ		2		
		演習Ⅱ		2		
		演習Ⅲ		2		
		特論Ⅰ		2	*2	
		特論Ⅱ		2		2
		看護教育学演習Ⅰ		2		
		演習Ⅱ		2		
		演習Ⅲ		2		
分野	臨床系看護学Ⅰ	特論Ⅰ		2		2
		特論Ⅱ		2		2
		特論Ⅲ				2
		小児看護学演習Ⅰ		2		2
		演習Ⅱ		2		2
		演習Ⅲ		2		2
		特論Ⅰ		2		2
		特論Ⅱ		2		2
		母性看護・特論Ⅲ				2
		助産学演習Ⅰ		2		2
分野		演習Ⅱ		2		2
		演習Ⅲ		2		2

領域	授業科目		修論コース		CN コース	
			単位数		単位数	
			必修	選択	必修	選択
専門	臨床看護学Ⅰ	特論Ⅰ		2		2
		特論Ⅱ		2		2
		特論Ⅲ				2
		成人看護学演習Ⅰ		2		2
		演習Ⅱ		2		2
		演習Ⅲ		2		2
		特論Ⅰ		2		
		特論Ⅱ		2		
		特論Ⅲ				
		老年看護学演習Ⅰ		2		
分野	臨床看護学Ⅱ	演習Ⅱ		2		
		演習Ⅲ		2		
		特論Ⅰ		2		2
		特論Ⅱ		2		2
		特論Ⅲ				2
		精神看護学演習Ⅰ		2		2
		演習Ⅱ		2		2
		演習Ⅲ		2		2
		特論Ⅰ		2		2
		特論Ⅱ		2		2
分野	臨床看護学Ⅱ	特論Ⅲ				2
		地域看護学演習Ⅰ		2		2
		演習Ⅱ		2		2
		演習Ⅲ		2		2
		特論Ⅰ		2	*2	
		特論Ⅱ		2		2
		看護管理学演習Ⅰ		2		
		演習Ⅱ		2		
		演習Ⅲ		2		
		特別看護研究	8			
分野		実習			6	
		課題研究			2	

*印の中より8単位以上を選択

士24名を社会に送り出している。修了生は日本の医療のさまざまな分野で看護の専門性を探求し、実践の科学としての看護の具現化を目指して活躍している。

日本における看護大学が100校をこえ、大学院で修士課程を持つ大学が50校を超える今日、私学として独創的な大学院教育を行ってきた本学も新たな展開を考える時期を迎えているといえよう。このような状況に対応すべく、本学の教職員有志による大学院教育のあり方を検討する「大学院将

来構想プロジェクト」が2000年に結成された。本研究の目的は、本学大学院の今後の方向性を検討するための基礎資料とすべく、過去20年間に蓄積された学位論文の特性を明らかにすることである。

文献検討の結果、国内における看護学の学位論文を対象とした調査は非常に少なかった。医中誌Web（1987～2002年）では、「大学院」と「学術論文」を同時に含むものに「修士論文」、「博士論文」を足しあわせ、「看護」を掛け合わせた件数は23件であった。このうち、国内の学位論文をテー

マとした文献は5件であったが、実際に複数の論文を調査した研究は、萱間と南¹⁾による研究倫理に関するもののみであった。

また、海外の文献についてはCINAHLで“The ses and Dissertations”を主題とし、“Nursing”, “Nurse*”を含む文献を検索したところ109件であり、さらにPublication Typeを“Research”と“Review”で絞り込むと30件であった(2002年11月現在)。Douglas²⁾は、1980~1989年に発表された看護学博士論文203編のうち188編を対象とし、研究の同意について調査したところ、同意を得ていた論文は57.4%という割合であった。Loomis³⁾は、1976~1982年に発表された博士論文の要旨と標題を分析し、看護研究で取り上げられる課題を明らかにした。また、医中誌Webで検索された文献の中には、国内研究者による海外の学位論文を対象とした研究があった。早川と片岡⁴⁾は、1986~1989年の米国における看護学博士論文632編を対象として動向を調査した。また、看護学教育研究に絞って動向を明らかにした一連の調査も見られた^{5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17)}。

以上のことから、特定の教育機関における学位論文の特性をまとめた報告はみられなかった。

II. 研究方法

1. 研究対象

対象となった学位論文は、本学大学院が開講した1982年から開設20周年を迎えた2001年の間に提出された修士論文278編、博士論文24編であった。

1980年開設当時の本学修士課程のカリキュラムは、基礎領域、臨床領域、機能領域から構成されており、修士論文は、臨床領域である「成人看護学」、「母性看護学」、「小児看護学」、「地域看護学」と、機能領域である「看護教育学」、「看護管理学」の6分野から選択することになっていた¹⁸⁾。臨床領域は、1983年に「精神看護学」が開講された。老人看護学に関しては、当初「成人看護学」の中に抱合されていた。1997年のカリキュラム改定において、基盤分野、専門分野に分け、さらに専門分野については3部門(基礎系:基礎看護学・看

護教育学, 臨床I:小児看護学, 母性看護・助産学, 成人看護学, 老人看護学, 臨床II:精神看護学, 地域看護学, 看護管理学)と「基礎看護学」、「老人看護学」の新たな開講,「母性看護・助産学」の改称を経て、9つの専門分野となった。なお「老人看護学」は1999年に「老年看護学」として改称された(表1)。また、このカリキュラム改定の際、日本看護協会の専門看護師制度の発足を受け、CNS(Clinical Nurse Specialist)コースが開講された。

2. データ収集

データ収集の項目とその内容について、本研究プロジェクトの3名の教員で話し合い、①論文タイトル、②専攻領域、③提出年(論文が提出された年)、④研究対象(ケアの受け手、ケアの提供者、ケアの受け手と提供者の両者、看護学生、その他に分類)、⑤研究デザイン(記述研究、相関研究、準実験研究、実験研究、方法論的研究(ただし博士論文のみ)に分類)、⑥データ収集方法(面接法、観察法、質問紙法、記録類、研究者による生理学的指標の測定、その他に分類)、⑦データ分析方法(量的分析法、質的分析法、量的・質的分析の両方に分類)、⑧量的分析の種類(記述統計、相関・t検定などの推測統計、因子分析・重回帰分析などの高度な統計、それらの組み合わせに分類)、⑨質的分析の種類(カテゴリー化・コード化、内容分析、グラウンデッドセオリーアプローチ、KJ法、現象学的アプローチ、エスノグラフィー、ライフヒストリー法、事例研究、その他に分類)、⑩倫理的配慮(倫理的配慮に関する章または項目立てをした記載の有無、研究の同意に関する記載の有無)、⑪論文タイトルに見られる特徴という枠組みを作成した。次に、本学修士課程修了者1名と博士課程学生2名ならびに修了者1名が278編の修士論文と24編の博士論文を1編ずつ読んで、①~⑪のそれぞれの項目について記載・分類した。さらに収集されたデータについて、再度、本研究プロジェクトの3名の教員と1名の司書が話し合いながらデータの確認・修正を行い、信頼性と妥当性を保持するよう努力した。

表2 修士論文提出年と専攻領域

		専攻領域									合計
		基礎	教育	小児	母性	成人	老年	精神	地域	管理	
提出年	1982		1	1	3	1					6
	1983			1	1						2
	1984			1	3						4
	1985					1		1			2
	1986				2	4		3	1		10
	1987				3	1		4			8
	1988			1	2	1		4	2		10
	1989		1	2	2	2		4	2		13
	1990			2	2	3		3	2	3	15
	1991			1		3		5	4	1	14
	1992		1	3	3	3		3	1	1	15
	1993		2	2		3		4	4		15
	1994		3	2	2	3		3	3	2	18
	1995		2		3	4		3	4	1	17
	1996			3	3	4		4	3	2	19
	1997		1	2	4	4		5	4	2	22
	1998			2	3	6		5	4	2	22
	1999	3	2	2	3	5(3)	2	5(2)	2	2	26(5)
	2000	2	1	1	3	2(1)		3(2)	1	2	15(3)
	2001	2	3	2(2)	3	5(1)	1	2(2)	4	1	25(5)
合計		7	17	28(2)	45	55(5)	3	63(6)	41	19	278(13)

()CNS 論文

なお、データ収集の際に、基本的には著者が論文に記載した内容を参考に分類したが、⑦研究デザインについては多様な記載が見られたため、研究者の判断で分類した。その際、研究デザインの記載とともに研究目的と実際の分析方法をみて、それらに一致が見られない場合には、分析方法を優先して質的研究のすべてと記述統計のみのものを記述研究デザイン、相関などの推測統計を行っているものを相関研究デザインとした。また、準実験研究・実験研究デザインにおいては、Polit & Hungler¹⁹⁾の定義に該当するものとした。⑪質的分析の種類については、著者が明記している分析方法のみを抽出し、それ以外は「その他」として分類した。内容分析についてのみ、明記されている場合に加え、明記されていないが抽出されたデータを量化して分析している場合も含むこととした。また、現象学的アプローチやグラウンデッドセオリーアプローチなどを「参考にして分析した」と記載されている場合もそれぞれの分析方法としてカウントした。

3. データ分析

データ分析は、年次推移と専攻領域ごとに記述統計を行った。すなわち、①論文提出数、②研究対象、③研究デザイン、④データ収集方法、⑤データ分析方法、⑥倫理的配慮を年次推移と専攻領域ごとに集計もしくはクロス集計を行った。⑦論文タイトルに見られた特徴については、本研究プロジェクトの教員によって専攻領域ごとに分析した後、各領域の現任の教授による内容の確認を行った。

Ⅲ. 結果

1. 修士論文

1) 提出論文数の領域別年次推移

修士課程開設当初からの提出論文数の年次推移と専攻領域別の論文数を示す(表2)。開設初年度は、提出された論文数も6編、4領域(看護教育学、小児看護学、母性看護・助産学、看護管理学)であったが、以後論文数は年々増加していっ

表3 修士論文専攻領域と研究デザイン

		研究デザイン			合計
		記述研究	相関研究	準実験研究	
専攻領域	管理	10	9		19
	基礎	5		2	7
	教育	14	3		17
	小児	21	6	1	28
	成人	40	12	3	55
	精神	50	12	1	63
	地域	25	16		41
	母性	28	13	4	45
	老年	1	2		3
合計		194	73	11	278

た。提出された論文も1989年には6領域、2001年には9領域となり広がりを見せた。

このような変遷の中で、専攻領域別に毎年提出される論文数は、3～6編と幅が見られた。さらに、領域による論文の蓄積も、3編（老年看護学）から63編（精神看護学）まで大きく数が異なった。

2) 研究対象からみた特徴

研究の対象は、ケアの受け手（患者・患児）178編、ケアの受け手とケア提供者（看護者）39編、ケア提供者のみ47編、学生10編、その他（看護教員・文献）4編の5つに分類された。ケアの受け手を研究対象にしたものが、毎年半数以上を占めていた。1990年代よりケアの受け手とケア提供者の両方をケアの対象とした論文が必ず、登場するようになった。

3) 研究デザインにみる特徴

専攻領域ごとにみた修士論文を研究のデザイン（表3）をみると、20年間の蓄積では、記述研究が、194編で7割を占めていた。続いて、相関研究73編26%、準実験研究11編4%、実験研究は0編であった。準実験研究は「基礎看護学」、「成人看護学」、「母性看護・助産学」領域において行われていた。また、1990年を除いて記述研究がいずれの研究デザインよりも多かったが、そのほか研究デザインの年次推移には明確な特徴は見られなかった。

4) データ収集方法にみる特徴

データ収集方法としては面接法が278編中195編と最も多く用いられており、続いて質問紙法111編、観察法103編、記録40編、研究者の測定による生理学的データ16編、文献4編が用いられていた。このように1論文につき、複数のデータ収集方法が用いられていることがわかった。たとえば、質問紙開発など研究の内容によっては、複数

表4-① 修士論文にみる量的分析の内訳

		量的分析					合計
		①記述統計	①記述統計 ②推論統計	①記述統計 ③高度な統計	①記述統計 ②推論統計 ③高度な統計	①記述統計 ③高度な統計	
提出年	1982	2					2
	1983		2				2
	1984		2				2
	1985	1			1		2
	1986	3	1		1		5
	1987		2				2
	1988	4	2		3		9
	1989		4		7		11
	1990	2	5		4		11
	1991		3		3		6
	1992	2	2		3		7
	1993	1	1		3		5
	1994	2	2		3	1	8
	1995	2			6		8
	1996	1	2		4		7
	1997	2	3	1	1		7
	1998	1	6		6		13
	1999	2	8		1		11
	2000				3		3
	2001		1		6		7
合計		25	46	1	55	1	128

表4-② 修士論文にみる質的分析の内訳

		質的分析								合計
		カテゴリー化 コード化	内容分析	グラウンデッド セオリー アプローチ	事例研究	現象学的 アプローチ	エスノグ ラフィ	KJ 法	ライフヒ ストリー	
提出年	1982		2		2				2	6
	1983		1							1
	1984		1		1				1	3
	1985		1							1
	1986	1	1	1					5	8
	1987			3	1			1	1	6
	1988	1			1				5	7
	1989	2			4					6
	1990	1	2	2	4				2	11
	1991	1	3	5	1					10
	1992	2	2	7					3	14
	1993	2	5	4	1	1				13
	1994	2	5	3	1	1			3	15
	1995	5	2		2		1		4	14
	1996	3	2	4					6	15
	1997	7	6	3	2				2	20
	1998	5			2		1	1	6	15
	1999	4	2		3	1			1	16
	2000	3			3		1		1	12
	2001	9	1	1	3	4			2	20
合計		48	36	33	31	7	3	2	2	213

の段階が1つの論文に含まれており、データ収集方法も面接法と質問紙法が含まれていた。また、1990年代以降は質的研究の割合が増えていることから、面接法が多く用いられていた。

5) データ分析にみる特徴

提出論文のデータ分析を大きく質的分析と量的分析に分類したところ、質的分析205編、量的分析128編、そのうち両方の分析を用いているものが55編であった。量的分析を行った128論文の分析方法の内訳をみると、記述統計のみの分析を行っている論文は全体の20%となっており、その多くが内容分析などによる質的分析との併用であった(表4-①)。128論文中55編(43%)が、相関・t検定などの推測統計と、因子分析・重回帰分析などの高度な統計法の両方を用いていた。量的分析の年次推移による明らかな特徴はみられなかった。領域ごとにみると、母性看護・助産学、看護管理学、精神看護学、地域看護学では、量的分析が比較的多く行われており、相関・t検定などの推測

統計と、因子分析・重回帰分析などを用いていた。

質的分析のうち、最も多かったのは、特定の方法論が明記されていなかったその他の分析に分類されたものであり、182論文中51編(28%)であった(表4-②)。これは、論文中に内容分析やグラウンデッドセオリーアプローチなど特定の分析方法が明記されていないものを含んでいる。その多くは、質的データの具体的な分析方法のプロセスを記載していた。次に多かったのは、48編(26.4%)でカテゴリー化・コード化を行う分析方法、続いて内容分析36編(19.8%)、グラウンデッドセオリーアプローチ33編(18.1%)であった。そのほか、現象学的アプローチ7編、エスノグラフィ3編、ライフヒストリー法2編は、論文数としては少ないが、最近になって少しずつ行われるようになってきた。逆にグラウンデッドセオリーアプローチは1990年代に入ってから増加がみられたが、ここ3、4年は減少傾向にある。領域ごとの比較では(表4-③)、地域看護学では33編中

表4-③ 修士論文にみる選考領域別質的分析の内訳

		質的分析									合計
		カテゴリー化 コード化	内容分析	グラウンデッド セオリー アプローチ	事例研究	現象学的 アプローチ	エスノグ ラフィ	KJ法	ライフヒ ストリー	その他	
専攻 領域	管理	2	1	3	2		1			2	9
	基礎				1					2	1
	教育	2	4		1	1				4	8
	小児	4	1	13	2				1	3	21
	成人	11	11		3	2	1			17	28
	精神	11	7	16	8	1	1		1	7	45
	地域	13	5		8			1		6	27
	母性	4	7	1	6	3		1		9	22
	老年	1								1	1
合計		48	36	33	31	7	3	2	2	51	162

13編がカテゴリー化・コード化の分析方法をとっていた。成人看護学、母性看護・助産学、看護教育学では2割以上が内容分析の手法を用いており、グラウンデッドセオリーアプローチ32編のほとんどが小児看護学（12編）と精神看護学（16編）であった。最近増加している現象学的アプローチは母性看護・助産学、成人看護学、精神看護学、看護教育学領域の論文で用いられていた。

6) 倫理的配慮にみる特徴

研究の倫理的配慮について何らかの形で配慮しているものは278編中221編（79.5%）であり、ほとんどの論文において、倫理的配慮がなされていたことがわかった。そのうちの155編（55.8%）では、倫理的配慮に関して1つの章ないし項で、詳細に述べていた。残りの72編は対象の同意について、研究方法の対象の項で記載していた。倫理的配慮の記述がなかった論文は51編であった。1990年代に入り、倫理的配慮について章立てする論文が増加し、その割合は1995年以降で8割以上となり、1997年以降ではほぼ100%が倫理的配慮について論文中に章立てしていた。

7) 領域別の論文タイトルに見られる特徴

論文タイトルに見られる特徴については、それぞれの論文において焦点をあてた①ひと、②現象（概念）、③看護ケアについての特徴を中心に各領域の傾向を分析した。

基礎看護学では全7編中、他の領域にはみられない文献を分析対象とする論文が2編みられた。

それ以外の論文は患者や看護の現象に焦点を当て、自律神経と看護ケアとの関係に関するものが3編みられ、ケアとしては背部蒸タオル温罨法が2編みられた。

看護教育学では、17編のうち、看護基礎教育に関するものが10編、このうち実習場面を対象にしたものが5編、そのなかで倫理的ジレンマが2編であった。継続教育に関するものは3編、对患者での看護師の適性能力に関するもの2編、学びに関するもの2編であった。

小児看護学の領域では、研究の対象として28編中患児に焦点を当てたもの16編、母親に焦点を当てたものが6編であった。患児と看護職の関係を研究対象にしているものは4編、看護職のみを対象にしているものは1編であった。論文タイトルからは、病院から家への移行の場面に関する研究が多いことがわかった。また、子どもにとってのさまざまな経験（外泊、化学療法、いやなこと、）の意味を明らかにする研究が4編みられた。

母性看護・助産学では、45編中周産期にあるひとを対象にしたものは34編あり女性（妊婦、産婦、褥婦）を対象にした論文が25編、子ども（新生児、早期産児）3編、父親・夫2編、夫婦1編、助産師と産婦2編、母と子1編がみられた。周産期以外にあるひとを対象にしたものは4編あり、不妊、性暴力などがみられた。さらに助産師を対象にしたものは7編あった。焦点を当てた現象または概念として、出産体験にまつわる「悲嘆」2編、「喪

失・LOSS」3編，羊水検査・出産方針についての「意思決定」2編，母子間・助産師と産婦間の「相互作用」2編など多岐にわたった。新たな看護ケアの効果に関する研究は，6編で，「ストレス緩和のためのタッチ」，「早期産児へのなだめの看護ケア」，「胎児心拍数のモニタリング行為」，「足浴」，「電話訪問」など多様にみられた。

成人看護学領域では55編中，タイトルから見て看護職に焦点を当てた研究は3編のみであった。その他の52編のうち，がん患者・家族に関する論文が25編で最も多かった。その内訳として，終末期がん患者・家族に関する論文が13編，手術・化学療法などを行っている治療期のがん患者に関する論文が12編であった。また，がん以外の慢性疾患患者に関する論文が7編であった。全論文で，家族を対象としたものは7編であった。論文タイトル中に含まれていた概念としては，ストレス・コーピング（対処過程含む）15編で最も多かった。ほかに適応，セクシュアリティ，不確かさ，自己効力，希望，セルフケアが2編ずつ見られた。また，タイトル中に表された身体的な状況としては，せん妄（急性錯乱状態含む）2編，がん性疼痛2編，尿失禁，呼吸困難，口内炎，褥創各1編が見られた。看護ケアに関する論文は13編の中で，看護介入モデルが4編（うち危機看護介入モデルが1編），患者のセルフケア能力を引き出すような教育的なアプローチが3編，症状の予測やアセスメント指標開発が4編であった。

老年看護学領域は1999年に開設されてから提出された論文は1編で「高齢在宅酸素療法利用者の生活に対する自己効力感尺度の開発」であった。なお1990年より成人看護学領域を専攻して老年期にある人を対象に研究した論文が6編あり，その内訳は痴呆に関するものが3編，せん妄・混乱に関するものが2編，水・電解質異常に関するものが1編であった。

精神看護学領域では63編中，看護職に焦点を当てた論文は18編あった。うち2編は看護師－患者関係に関するもので，8編は看護職全般の burn out，臨床能力の熟練過程，意思決定，ケア意欲，専門職的自立性，職場満足などに関するもので，

8編は精神科領域など特定の領域における看護職に焦点を当てたものであった。看護の対象としては精神科疾患を持つ患者に焦点を当てた研究が18編で，うち8編が統合失調症（分裂病）患者に焦点を当てていた。また，がん患者に関するものが10編，慢性疾患患者が7編，老人が4編であった。タイトル中に見られた概念として多かったのはストレス・コーピングに関する概念で7編，認知が7編，ソーシャルサポートやソーシャルネットワークに関する概念が6編，生活行動や生活設計など生活に関する概念が4編，経験が4編，ケア・ケアリングが3編，QOL，セルフケア，心理教育が各2編見られた。さらに，1999年以降の CNS コースの論文を中心にしてアセスメント指標の開発や服薬自己管理プログラム・心理教育プログラムの作成などケアの開発に関する論文が見られるようになった。

地域看護学領域では42編中，看護職または看護職の関わりに関心を当てた論文は11編見られ，他領域より割合としてやや多い結果となった。そのうち看護の対象者との相互作用に焦点を当てたもの，訪問看護者の判断や意思決定に焦点を当てたものが3編ずつあった。残りの31編では，在宅慢性疾患患者に関するものが12編，介護者に関するものが8編，母子・父子・夫婦などの家族に関するものが6編，地域組織活動に関するものが6編，老人に関するものが5編，産業保健に関するものが4編と，特徴として集団を対象とした研究が比較的多く見られていた。タイトル中に見られた概念としては，介護負担感，システム各3編，相談，コミュニケーション，判断各2編，QOL，ADL，対処，不適応，満足感，性役割，喪失，ライフスタイル，自己決定，マネジメントなど多岐にわたっていた。7割以上がケアを受ける対象の理解を深める研究であった。

看護管理学では，患者の看護サービスへの期待を明らかにしたものが，20編中3編と複数見られた。婦長に焦点を当てた論文が5編見られ，その内容は婦長の「リーダーシップ」（2編），「役割・能力」，「イノベーションモデル」などが見られた。また，若い新卒看護師に焦点を当てたものが2編

表5 博士論文の概要

研究領域	論文タイトル	年	本研究 予備研究	研究対象	データ収集方法	分析方法 量的分析 記述統計・推測統計・高度な統計法	質的分析 記述統計・推測統計・高度な統計法
成人	虚血性心疾患をもちながら生活する男性のクオアリティ・オブ・ライフに関する記述的研究	1992	方法論的研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙 面接	記述統計・推測統計・高度な統計法	質的分析
	腹圧性尿失禁をもつ中高年女性の尿失禁自己調整プログラム開発に関する実験的研究	1993	実験研究 相関研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙	記述統計・推測統計・高度な統計法	内容分析
	腎移植を受けたレシビエントのQOLを高めるための看護援助プログラムの作成に関する研究	1996	相関研究 記述研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙・面接・観察 面接・観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他
	糖尿病をもつ壮年期の人々の自己管理行動を促進するための教育的アプローチに関する研究	1997	相関研究 方法論的研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙・面接・観察 質問紙・面接・観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他
	術後の排痰時に苦痛の少ない咳を促す看護ケアプログラムの開発と評価に関する研究	1999	準実験研究 記述研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙・面接・観察・記録 質問紙・面接・観察・記録	記述統計・推測統計	
	がん患者とともにいきいきする介護者の家族調和尺度の開発:信頼性と妥当性の検討	2001	方法論的研究 方法論的研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙 面接	記述統計・推測統計・高度な統計法	内容分析
	看護ケアの構造化・プライマリ・ナーズ・サポートシステムにおける看護ケアの構造とプロセスの分析	2001	記述研究	ケアの提供者	面接・観察・記録		内容分析
	がん体験者の長期的な適応に関する研究一折り合いをつける力と関連要因の分析一	2001	方法論的研究 方法論的研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙 質問紙	記述統計・推測統計・高度な統計法	
	リエゾン精神看護におけるコンサルテーションの機能とその効果	1995	相関研究	ケアの提供者	面接 質問紙 記録	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他
	看護婦・患者関係における信頼を測定する質問紙の開発:信頼性・妥当性の検定	1995	方法論的研究	ケアの受け手(患者・患児)	質問紙	記述統計・推測統計・高度な統計法	
精神	地域で生活をする精神分裂病者の自己決定に基づくセルフケア行動の実態	1997	記述研究	ケアの受け手(患者・患児)	質問紙・面接	記述統計・推測統計	内容分析
	慢性関節リウマチ患者が体験する問題とセルフケア行動	1997	相関研究	ケアの受け手(患者・患児)	質問紙・面接	記述統計・推測統計	内容分析
	精神障害・当事者にとつての病いの意味:地域で生活する4人のライフヒストリーから	1997	記述研究	ケアの受け手(患者・患児)	面接・記録		ライフストーリー法
	「がん患者苦悶尺度」の開発: 信頼性・妥当性の検討	1999	方法論的研究 記述研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙 面接・文献	記述統計・推測統計・高度な統計法	内容分析
母性	褥瘡の睡眠・覚醒の経時的変化に関する研究:こどもの動きとの関係に焦点を当てて	1993	相関研究	ケアの受け手(患者・患児)	質問紙・面接・観察 質問紙・面接・観察	記述統計・推測統計	
	腰痛のある妊婦に対する足浴の効果	1998	準実験研究*	ケアの受け手(患者・患児)	質問紙 観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	
	母乳ケアの質の保証に関する基礎的研究:ケアの受け手の認識にもとづく質の評価	1999	相関研究 記述研究	ケアの受け手(患者・患児)	観察・生理学的データ 観察・生理学的データ	記述統計・推測統計	内容分析
	生後1か月児の夜間の睡眠状況と養育者の応答性および気質の認識形成との関連	2001	相関研究 相関研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙・面接・観察 観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他
管理	看護婦の専門職性を測定する質問紙の開発	1999	方法論的研究	ケアの提供者	質問紙・面接・文献 面接・観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他
	看護提供チームにおけるエンパワーメントの様相	2001	記述研究 相関研究	ケアの受け手とケア提供者 (看護者)	質問紙 面接・観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他
地域	痴呆老人と主たる介護者との家庭における相互作用の構造	1994	記述研究	ケアの受け手(患者・患児)	面接・観察		グラウンデッドセ オリー・アプローチ
	脳血管障害者と家族介護者の退院後の生活行為に生じる困難を解決するための理論	2001	記述研究 相関研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙・面接・観察 面接		その他
小児	カンガルーケアを実施した母親の愛着と早期産体験の癒し	2001	相関研究 記述研究	ケアの受け手 (患者・患児)	質問紙・面接・観察 面接・観察	記述統計・推測統計・高度な統計法	その他

・本研究、予備研究の欄は、枠が一つの場合は、本研究の記載のみの場合である。
・生理学的データとは、研究者自身が測定した生理学的データのものを表す。

・質問紙*は、翻訳して作成した物を使用している。
・準実験研究*は、予備研究を行った結果の記載のみであったことを表す。

見られ、その内容は「ストレス」、「パフォーマンス」、「職場への適性」を扱っていた。その他、「看護師のキャリア」「職場の風土や文化」、システムとしての「ケアの構造」や、「コラボレーション」などの看護現象に焦点を当てていた。

2. 博士論文

1) 領域と年次推移

博士論文は、1992年度より毎年1～7編あり、2001年まででは総数24編であった。その概要を専攻領域別に表した(表5)。専攻領域別では、成人看護学が8編と最も多く、次いで精神看護学が6編、母性看護・助産学5編、看護管理学と地域看護学が各2編、小児看護学が1編であった。基礎看護学、看護教育学、老年看護学の領域は1992年に初めて論文が提出され、以後、毎年1～7編が提出された。

2) 研究対象からみた特徴

研究の対象は、約8割の19編がケアの受け手(患者・患児)を対象としており、ケアの受け手とケアの提供者(看護者)が2編、ケア提供者のみが3編であった。

3) 研究デザインにみる特徴

研究デザインでは、本研究(または臨床研究、二次研究を表すが、以下本研究と略す)に至る前段階として、予備研究(または基礎研究、一次研究を表すが、以下予備研究と略す)を位置づけて論文に書き表しているものが13編見られた。

これらの本研究のデザインを見てみると、相関研究が最も多く8編、尺度開発などの方法論的研究が6編、記述研究は6編、準実験研究は3編、実験研究が1編行われていた。

また、研究の展開を、予備研究から本研究に至る過程でみると、記述研究6編、相関研究4編、方法論的研究3編であった(表6)。予備研究についての記載がなく本研究のみの論文は11編であった。

4) データ収集方法にみる特徴

データ収集方法では、質問紙が22件(うち予備研究6件)、次いで面接が21件(うち予備研究6件)と多く、ほとんどの論文で質問紙と面接法が用い

表6 博士論文の研究デザイン(予備研究と本研究)

予 備 研 究	本 研 究	件 数
記 述 研 究	相 関 研 究	3
	準 実 験 研 究	1
	方法論的研究	2
相 関 研 究	記 述 研 究	2
	相 関 研 究	1
	実 験 研 究	1
方法論的研究	相 関 研 究	1
	方法論的研究	2
	記 述 研 究	4
	相 関 研 究	3
	準 実 験 研 究	2
	方法論的研究	2
合 計		24

られていた。この質問紙22件のうち、2件は既存の海外の測定用具を翻訳して作成した質問紙であり、残りの20件は、研究者が独自に作成した質問紙であった。この他、観察によるデータ収集は13件(うち予備研究5件)、記録が9件(うち予備研究3件)、研究者自身が測定した生理学的データは5件(うち予備研究1件)であった。

5) データ分析にみる特徴

データ分析では、量的な分析方法が42編、質的な分析方法が21編と量的な分析方法が6割を占めていた。さらに、量的な分析方法は、記述統計のみの1編以外は、記述統計・推測統計24編(うち予備研究6編)と記述統計・高度な統計17編(うち予備研究6編)であった。

質的な分析方法では、その他が10編(うち予備研究4編)、内容分析6編(うち予備研究4編)、グラウンデッドセオリーアプローチ4編(うち予備研究1編)であった。この他、ライフヒストリー法を用いたものが1編あった。KJ法、現象学的アプローチ、エスノグラフィー、事例検討はまったくなかった。

また、質的分析と量的分析を組み合わせた論文は、24編中12編であり、質的分析のみが8編、量的分析のみが4編であった。

年次推移からは、データ分析上の明らかな特徴は見られなかった。

IV. 考察

1. 多様な研究テーマとデザイン

修士論文では、テーマは多岐にわたり、新たな医療状況に直面している患者等、ケアの受け手を研究対象として対象の理解を深める研究が半数以上を占めていた。学生の関心を尊重するこの傾向は、他の看護大学の大学院教育においても見られている²⁰⁾²¹⁾²²⁾²³⁾。研究デザインではテーマの多様性から記述研究が圧倒的に多く見られた。その中には、準実験研究や実験研究にいたらないまでも看護実践の創造として、既存の看護ケアの概念化や新たな看護の試みの介入もいくつか含まれていた。このようにその時代を反映する視点からの意欲的な研究のとりくみが多かったといえよう。

博士論文では、修士論文もしくは予備研究からの積み重ねによって研究の段階が進み、研究デザインでは相関研究が多く行われていた。さらに前期・後期課程5年間の研究の積み重ねで、介入研究を行っているものも数少ないが見られている。また、看護の領域で使える尺度がまだ十分に開発されていないという現状があるためか、看護の対象（ひと）に関する現象の理解を深める目的でいくつかの尺度開発が行われている。これらの研究は看護学の基盤を作り、実践の質を向上させる研究として評価することができるだろう。

2. 大学院は何を達成レベルと考えるか

本学においては、修士課程にCNSコースと論文コースがある。今回の分析では、CNSコースの課題研究として行われた成果物も修士論文として含めて分析を行った。海外においては、多様な最終成果物の提出のあり方が見られている。すなわち、多くの大学では、学生が独立して研究し論文を完成させる、研究プロジェクトに参加する、試験を受けるなどの中から一つまたは複数を成果物として求められるなどの選択肢をもっている。また、修士課程では主として臨床家を育成するコースが中心で、博士課程につながる論文コースとは明確に分かれている。そのため臨床へ戻って上級実践看護師としての活躍が期待される修了生には、

臨床家としてアウトカムメジャーメントを意識することや、看護ケアが他職種の提供するケアと比較して同等もしくはより効果的な成果をあげていることを明らかにするデータを収集・分析・提示する能力が求められている²⁴⁾。

本学における今後のCNS教育の視点として、他職種との共働の中で看護の介入の視点を意識できる臨床家の育成にむけた支援をカリキュラム上検討されることも必要となろう。たとえば、学生の関心テーマを尊重する一方で教員の研究分野に関心をいさぐ学生が入学してきた場合には、助成金を得た大規模な研究プロジェクトの一部に学生が参加するような研究の指導体制も検討する必要があると考えられる²⁵⁾。

一方博士課程においては、独立した研究者としての能力を身に付けることが期待されており、幅広く深い知識の基盤のうえに、研究を展開していけることが求められる。そのためにも博士前期（修士）・後期課程を通して一連の研究の積み重ねができるような取り組み方が必要となるだろう。

3. 論文作成に関する支援

今回の分析の経過において、年々方法論の記述が洗練されていき、その論文のデザインや分析について明瞭に記述されていく傾向がみられた。このような推移は、1986年よりはじまったUCLA Dr. Holzemerの招聘による研究法の講義、1993年より大学院教育に携わる専任教員の配置（研究法・理論）等が影響していると考えられる。

研究の倫理的側面については、1992年に倫理審査委員会が設置されるまでは研究科委員会がその役割を担っていた。委員会の設置後は、特に倫理的問題を生ずる可能性のある研究計画書のみ委員会に提出され審議されていた。その後、社会の変化、時代の要請を考慮して2001年4月以降、すべての修士・博士論文計画書は委員会の審査を経てから研究を実施することが義務付けられることになった。このような背景が論文に見られた倫理的配慮の記載の変遷に影響したことがうかがえる。

今後、他大学においても大学院が次々と増設される中で、受験生が本学を選択するために必要な

情報として、これまでにどのようなテーマがその研究室でなされてきたのかは重要な点である。本学を希望する学生に対して、今回実施した本学の修士・博士論文の分析の成果を発信していく必要がある。このような支援体制の一つとして、本学の図書委員会が系統的な看護用語の検索の開発をめざして検討をはじめている²⁶⁾。修士論文の形式も年々整備されている。現在電子図書館の導入に伴い、修士論文の電子化も進められているが、キーワードが掲載されていない過去の論文の検索は難しい状況にある。大学院教育の充実にむけて、看護用語シソーラスの充実が望まれる。さらに、近年では学会発表や学会誌への論文の投稿に関する指導にも重点がおかれてきた。倫理的な側面も含めて、毎年学内での学位論文発表会後にオリエンテーションがなされている。このような支援を受けながら、本学の学位論文が世界にむけて発信されるような支援体制が期待される。

4. 研究の限界と今後の課題

今回の分析の視点に用いた枠組みは、量的な研究にそった分類であり、質的な研究における分類は十分とは言いがたい。今後は、質的な研究の分析の視点を加えていく必要がある。また、論文タイトルから見た特徴は、内容と若干の相違があると予測できる。本学の学位論文全体の主たる傾向や特徴は表すことができたと考えるが、詳細な内容についての分析は領域ごとや各論文が焦点を当てている現象や概念ごとに今後、行っていく必要があるだろう。また、すでに多くの論文が刊行されているが、その数や割合を把握することができなかった。今後は各論文の研究結果がどの程度、活用されているのかを把握することも研究の内容や質を判断する指標として把握していく必要があると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたって2000・2001年度大学院将来構想プロジェクトの小山真理子先生、木村登紀子先生、酒井禎子先生、小谷野康子先生、故熊田衛先生のご協力に心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 萱間真美, 南裕子. 修士論文作成に関する倫理的問題の研究者による認識およびそれに対する配慮の実態調査 1982年～1992年度の10年間に作成された A 看護大学修士論文について. 聖路加看護大学紀要, 20, 1994, 35-39.
- 2) Douglas, S. The reporting of consent rates in nursing dissertations. *Western Journal of Nursing Research*, 15 (4), 1993, 495-505.
- 3) Loomis, M. E. Emerging content in nursing: an analysis of dissertation abstracts and titles: 1976-1982. *Nursing Research*, 34 (2), 1985, 113-119.
- 4) 早川和生, 片岡万里. 看護研究領域の体系化に関する基礎的研究 (第1報): 米国における最近の看護学博士論文632編の分析より. *日本看護科学会誌*, 10 (3), 1990, 166-167.
- 5) 舟島なをみ, ほか. 米国の博士論文にみる看護教育研究の現況: 質的研究の方法論に焦点をあてて. *Quality Nursing*, 2 (7), 1996, 612-618.
- 6) 鈴木恵子, 定廣和香子. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育の歴史に関する研究. *Quality Nursing*, 3 (7), 1997, 750-758.
- 7) 横山京子, 小川妙子. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 学士号をもたない看護婦(士)の看護学士課程入学に関する研究. *Quality Nursing*, 3 (8), 1997, 856-861.
- 8) 亀岡智美, 小林小百合. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育カリキュラム開発に関する研究. *Quality Nursing*, 3 (9), 1997, 953-959.
- 9) 岩波浩美ほか. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育の組織運営に関する研究. *Quality Nursing*, 3 (10), 1997, 1043-1050.
- 10) 定廣和香子, 中谷啓子. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育の教育方法に関する研究. *Quality Nursing*, 3 (11), 1997, 1134-1141.

- 11) 小川妙子, 横山京子. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教師に関する研究. *Quality Nursing*, 3 (12), 1997, 1225-1232.
- 12) 安齋由貴子, 大賀明子. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護職の卒後教育に関する研究. *Quality Nursing*, 4 (2), 1998, 150-157.
- 13) 小林小百合, 亀岡智美. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学生に関する研究. *Quality Nursing*, 4 (1), 1998, 55-63.
- 14) 大賀明子, 杉森みど里. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育の評価に関する研究 (1). *Quality Nursing*, 4 (3), 1998, 234-241.
- 15) 大賀明子, 杉森みど里. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育の評価に関する研究 (2). *Quality Nursing*, 4 (4), 1998, 329-336.
- 16) 大賀明子, 杉森みど里. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 看護学教育の評価に関する研究 (3). *Quality Nursing*, 4 (5), 1998, 418-424.
- 17) 野本百合子, 定廣和香子. 米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向: 学習活動に関する研究. *Quality Nursing*, 4 (6), 1998, 523-530.
- 18) 菱沼典子. "大学院の設置から今日まで". 聖路加看護大学大学院開設20周年. 東京, 聖路加看護大学, 2001, 22-28.
- 19) Polit D.F., Hungler B.P. 近藤潤子監訳. 看護研究: 原理と方法. 東京, 医学書院, 1994, 90-105.
- 20) 千葉大学大学院看護学研究科の現在. *Quality Nursing*, 6 (2), 2000, 100-155.
- 21) 日本赤十字看護大学大学院の現在. *Quality Nursing*, 6 (3), 2000, 188-233.
- 22) 北里大学大学院看護学研究科の現在. *Quality Nursing*, 6 (4), 2000, 284-317.
- 23) 東京医科歯科大学大学院保健衛生学科の現在. *Quality Nursing*, 6 (5), 2000, 372-419.
- 24) Bower, F. L. A survey of the ways master's level nursing students learn the research process. *Journal of Nursing Education*, 38 (3), 1999, 128-132.
- 25) May, K. M., Holzemer W. L. Master's thesis policies in nursing education. *Journal of Nursing Education*, 24 (1), 1985, 10-15.
- 26) 松本直子, 森明子, 久代和加子, 横山美樹. 聖路加看護大学電子図書館看護用語シソーラス作成の課題. 聖路加看護大学紀要, 2001, 90-97.